大学院生プロジェクト型研究・研究成果報告書

研究代表者：高 昌豪（教育心理学コース）

■研究題目

なぜ青年はアカウント化するのか
―現代青年の分断された友人関係―

■研究代表者・分担者 氏名

高 昌豪（教育心理学コース）（代表者）

■研究成果概要（目的、実施内容、結果、今後の課題など）

【問題と目的】

青年期後期以降では、友人関係において深く内面的な付き合いが求められるとされており、青年が表面的な友人関係をとることにより心理適応上の問題に繋がるとする見方が多い（上野・上瀬・松井・福富,1994；小塩,1998；岡田,2007a）。

その中でも「キャラ」は、表面的な友人との付き合い方として挙げられているものの中でも象徴的なもので、千島・村上（2015）は、社会学領域の先行研究やメディアの記述などから「キャラ」を「小集団内での個人に割り振られた役割や、関係依存的な仮の自分らしさ」と定義し、既存の特徴に落とし込むことで人格の多様さを削ぎ落として人間関係を単純化・円滑化させることとした。そしてその特徴を他律的であることや、どの集団でもある程度固定されていることとした。

しかしながら、青年にとって友人関係は多岐にわたり（厚生労働省,2014 など）、状況に応じてその「キャラ」や付き合い方は異なるだろう。大谷（2007）の指摘によると、従来の研究で青年期の友人関係の検討は主に「広さ」と「深さ」だけが議論されてきたが、実際の青年は場面に応じて様々な深さや広さの友人関係を構築していることを示している。岡田（2007a,2007b）などの先行研究においては、現代青年の友人関係の特徴を「傷つけ合わず楽しさだけを希求する、防衛的で同調的な付き合い方」を常にとることとしていたが、大谷（2007）は青年が一つの「群れ」的関係だけでなく、様々な関わり方の中にあることを示唆している。

青年が場面に応じて自身の「キャラ」や属する「群れ」を切り替えて付き合うことは「アカウント」的な付き合いといえる。青年にとって友人とは、先行研究のように常に一定のキャラや同じ相手と浅く付き合うのではなく、SNS の「アカウント」のように「キャラ」

ごとに異なる相手、あるいは相手ごとに異なる「キャラ」を持つものである。

大谷（2021）によると、「アカウント」的な付き合いは青年にとって負担となる一方、成人期以降の付き合いでは必須のスキルであるとされている。しかしながら青年は、自己を断片化させ、付き合いを分断させるような友人関係を望んでいるわけではない。

青年が友人関係においてさえ高いスキルが求められ、複雑な関係の中にあることについて、白井・大谷（2017）によると、青年が極めて関係依存的な環境にあり、行き場を失わないことが必要とされることで、その関係を維持して同調することが青年にとって重要なことになっているとしている。高いスキルを要する人間関係による、複層的な関係の中で、自身を一貫させず変化させ続けることになった青年は、自己実現と親密さの欲求が満たされず（白井・大谷,2017）、自身の友人関係にも満足できないだろう。

一方で、負担になるような付き合い方を青年が続ける「青年自身の動機」については、先行研究においても実際的な調査のないままである。白井・大谷（2017）では現代社会の対人依存性の高さに対する関係維持の欲求を挙げており、大谷（2021）では成人期に向けた試行錯誤であるという考察を、千島・村上（2015）ではキャラのメリットを挙げているものの、それが即ち青年の動機になるかは不明確なままである。

そこで本研究では、この“動機”を検討するため、佐久間・無藤（2003）の指摘した「関係的自己の変化動機」に着目する。佐久間・無藤（2003）によると、青年が関係に応じて付き合い方を変える動機は「関係維持」「関係の質」「自然・無意識」「演技隠蔽」の 4 つが挙げられる。本研究では青年が「アカウント」を切り替えるように自身や付き合う相手を変化させる動機として、これと同様のものを想定する。

また、青年が付き合い方を変えようとする動機をもたらすものとして、公的自意識を想定した。公的自意識とは菅原（1984）によると、自分が他者からどのように見られるかについての意識であり、本研究では公的自意識が青年に関係に応じて自身の振る舞いを変化させようとする動機をもたらし、青年の「アカウント」的な分断された友人関係に繋がっていると想定する。

以上のことから、本研究は以下のような想定のもとに行う。

1 青年が分断された友人関係をとる動機を検討する。
2 青年が分断された友人関係をとる動機への公的自意識の影響を検討する。
3 分断された友人関係が青年の友人関係への満足度に及ぼす影響を再検討する。

また、Figure1 のような仮説モデルを設定し、これを検証する。

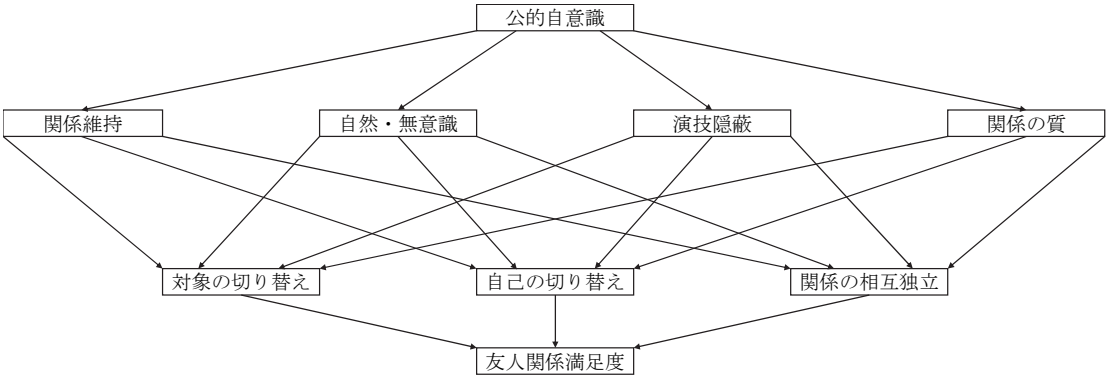

Figure1 仮説モデル

【方法】

質問紙の内容

1. 日本語版自意識尺度

菅原（1984）の公的自意識についての質問項目 11 項目を 5 件法で用いる。

2. 友人関係の切り替え尺度（アカウント的関係尺度）

大谷（2007）の 18 項目を 5 件法で用いる。

3. 関係的自己の変化動機尺度（アカウント化動機尺度）

佐久間・無藤（2003）の 26 項目を 5 件法で用いる。

4. 友人関係満足度

豊田（2004）で作成された 8 項目を 5 件法で判定する。

5. フェイスシート

年齢・性別をたずねた。

【結果】

公的自意識尺度 11 項目（M＝3.86、SD＝.78）の Cronbach の α を算出したところ、α＝.90 となり、十分な信頼性が確認され、その平均値を公的自意識得点とした。

アカウント的関係尺度の下位尺度項目について Cronbach の α 係数を算出したところ、「対象の切り替え」7 項目（M＝3.11、SD＝.66）で α＝.57、「自己の切り替え」7 項目（M＝3.50、SD＝.63）で α＝.68、「関係の相互独立」4 項目（M＝3.32、SD＝.74）で α＝.44 であった。

アカウント化動機尺度の下位尺度項目について Cronbach の α 係数を算出したところ、「関係維持」8 項目（M＝4.05、SD＝.67）で α＝.83、「自然・無意識」5 項目（M＝3.73、SD＝.86）で α＝.89、「演技隠蔽」7 項目（M＝3.50、SD＝.84）で α＝.83、「関係の質」6 項目（M＝4.03、SD＝.70）で α＝.80 となり、十分な信頼性が確認されたため、各下位尺

度得点の平均をその尺度得点とした。

友人関係満足度尺度 8 項目（M＝3.63、SD＝.83）の Cronbach の α を算出したところ、α＝.87 となり、十分な信頼性が確認され、その平均値を友人関係満足度得点とした。

仮説モデルを検証するため、共分散構造分析によるパス解析を行った。5%水準で有意とならなかったパスと誤差を消去し、修正指数をもとにパスを追加し、Figure2 に示す。$\chi^2(22)$＝65.59(p≦.01)、GFI＝.95、AGFI＝.91、CFI＝.92、RMSEA＝.08 であった。

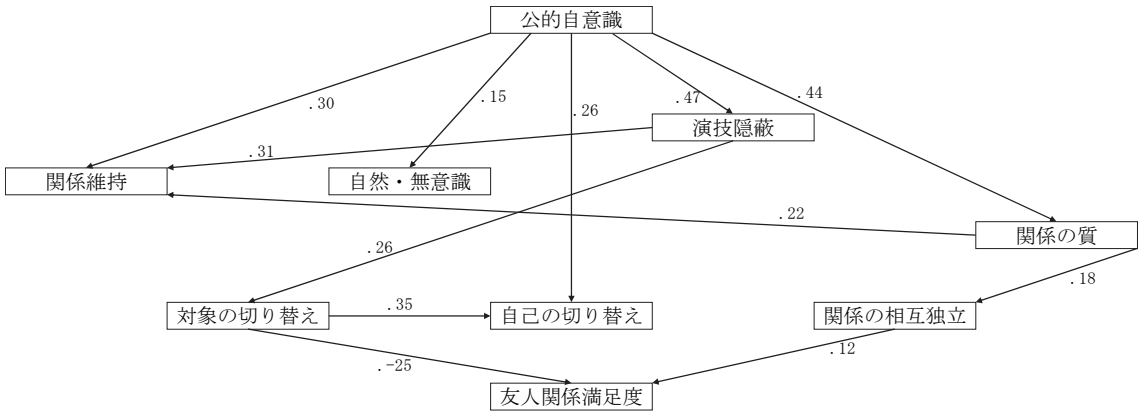

Figure2　アカウント化のモデル

【考察】

公的自意識からは「関係維持」(β=.30)、「自然・無意識」(β=.15)、「演技隠蔽」(β=.47)、「関係の質」（β=.44）と、全てのアカウント化動機へ正のパスが見られた。また、公的自意識からアカウント的関係尺度のうち「自己の切り替え」に対して正のパス（β=.26）が見られた。公的自意識とは、他者からの自身についての意識であり、他者の視点を内在化した意識（菅原,1984）とされている。青年が分断された「アカウント」的な友人関係をとる動機は、青年が周囲から「アカウント」的な付き合いを必要とされていると感じていることが影響していると見ることができる。白井・大谷（2017）では青年の記述から、青年が関係依存的な社会にあることで、関係を維持するために周囲の要請に対して同調的な付き合いをしていると解釈しており、本研究でも同様に内在化した他者の視点への意識が青年のアカウント化動機を促進していることが示された。

アカウント的関係のうち、「対象の切り替え」へは「演技隠蔽」から正のパス（β=.26)、「関係の相互独立」へは「関係の質」から正のパス（β=.18）が見られた。

青年がアカウントごとに関係を独立して考える動機としては、アカウントごとに「関係の質」が異なるという動機が存在することが示されている。アカウントごとに付き合う相手へ配慮し、関係同士を分断して考えることができるという、青年の友人関係に求められる社会的なスキルとみなすことができる。

また、アカウントごとに相手を切り替える動機として、異なる自身を演じているからであるという動機が示された。「演技隠蔽」は相手によって提示する自分が異なるようにしたいという動機であり、これが翻って提示したい自己ごとに相手を変えるという行動となっていると考えられる。

一方、アカウント的関係のうち「自己の切り替え」は公的自意識から直接の正のパス（β＝.26）が見られた。青年がアカウントごとに異なる自分を見せるのは、自分についての他者の視点への意識によるものであることが示された。一方で「自己の切り替え」にはアカウント化動機のいずれからもパスが見られなかった。

友人関係満足度へは、「対象の切り替え」から負のパス（β=-.25）が見られた。これは青年がアカウント化することで複数の対象と複雑な友人関係を構築することを負担に感じるという大谷（2018）の指摘を支持するものとなった。その一方で「関係の相互独立」からは正のパス（β=.12）が見られ、青年が関係同士を相互に独立させて考え、友人関係に求める機能（松井,1990）や自己実現の欲求（白井・大谷,2017）を断片的に満たすことで、それぞれのアカウントにおける不満足を他のアカウントで満たしていることが考えられる。あるいは、青年がその関係に応じてアカウントを切り替えることで、そのアカウント独自の満足度を見つけ出していることで、友人関係への不適応感を避けるようにしている青年の姿が考えられる。千島・村上（2015）では、自身に好ましい「キャラ」を持つことが青年の友人関係への満足度を高めるとしていた。本研究では自身に好ましい「アカウント」とそうでない「アカウント」を独立させて考えることで、青年自身の統合的な友人関係への満足度の下降を避けていると捉えることもできる。

また「対象の切り替え」から「自己の切り替え」に正のパス（β=.35）が見られた。これは複数の関係を前提に、その関係に合わせて自己を切り替えるという、青年のアカウント化の流れを示すものとすることができるだろう。相手によって自己を切り替えることが、青年の公的自意識から影響を受けていることからも、青年のアカウント化に公的自意識が及ぼす影響を見て取ることが出来るだろう。

青年は「アカウント」的な分断された友人関係をとるが、これには青年の公的自意識が影響していることが本研究では確認された。特にアカウント化動機に対しては直接的な影響を及ぼし、またアカウント的友人関係のうち自己を切り替えることについても直接の影響を及ぼしていた。

これは青年がアカウント的な友人関係を青年自身が望んで行っているというよりは、関係からの要請を受けているという青年自身の認知によるものであり、青年が自身にとって負担となり友人関係満足度を低めるアカウント的付き合いを続ける要因として公的自意識、ひいては青年が置かれた社会環境についての検討が必要となっているとすることができるだろう。従来はただ「場当たり的」「群れ的」とされてきた青年の友人関係の希薄さには、青年独自の社会からの要請や認知が関係していると見るべきである。

【文献】

千島雄太・村上達也(2015).現代青年における“キャラ”を介した友人関係の実態と友人関係満足感の関連―“キャラ”に対する考え方を中心に―.青年心理学研究 26(2),129-146.

平石賢二(2010).友人関係.日本児童研究所（編）児童心理学の進歩 Vol49,27-51.金子書房.

加藤弘通(2020).青年期以降の発達研究の動向と展望.教育心理学年報 59,9-27.

厚生労働省（2014）平成 26 年度全国家庭児童調査結果の概要. 厚生労働省 https://www.mhlw.go.jp/content/11920000/2kekkagaiyou.pdf（2021 年 1 月 24 日）.

松井豊(1990).友人関係の機能.斎藤耕二・菊池章夫（編）社会化の心理学ハンドブック―人間形成と社会と文化.川島書店.

大谷宗啓(2007).高校生・大学生の友人関係における状況に応じた切替―心理的ストレス反応との関連にも注目して―.教育心理学研究 55(4),480-490.

大谷宗啓(2018).大学生にとって友人関係における状況に応じた切替とはどのような体験なのか―自由記述と半構造化面接によるボトムアップアプローチ―.滋賀大学教育学部紀要 人文・社会科学 68,99-113.

大谷宗啓(2021).同性友人関係における状況に応じた切替の生涯発達―中学生から高齢者を対象とした横断調査―滋賀大学教育実践研究論集 3,129-136.

岡田努(1995).現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察.教育心理学研究 43(4),354-363.

岡田努(2007a).大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達の関連について.パーソナリティ研究 15(2),135-148.

岡田努(2007b).現代青年の心理学 若者の心の虚像と実像.世界思想社.

小塩真司(1998).青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連.教育心理学研究 46(3),280-290.

佐久間路子・無藤隆(2003).大学生における関係的自己の可変性と自尊感情との関連.教育心理学研究 53(1),33-42.

白井利明・大谷宗啓(2017).現代青年の友人関係は希薄化したのか―青年バッシングという世代間格差に抗して―.心理科学 38(2),1-9.

菅原健介(1984). 自意識尺度（self-consciousness scale）日本語版作成の試み.心理学研究 55(3),184-188.

豊田瀬理乃(2004).対人関係上の信念の変化からみた友人関係の分析.平成 15 年度筑波大学人間学類卒業論文(未公刊）.

上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護(1994).青年期の交友関係における同調と心理的距離.青年心理学研究 42(1),21-28.